

執筆担当	所在地	畜種	キーワード
鳥取牧場 業務課	鳥取県 琴浦町	肉用牛	防疫演習、立入検査、JGAP

家畜改良センター鳥取牧場における防疫対応の紹介

昨今の畜産業界では、今まで日本で発生されていなかった疾病が確認されてしまうというニュースがしばしば聞かれます。そういった疾病に対応するには「まさか発生しないだろう」ではなく「発生した時のことを考えて備える」といった準備が必要です。

家畜改良センター鳥取牧場では家畜伝染病が発生した時の初動対応を主とした防疫演習や、近隣家保職員の立入検査による防疫点検、そして JGAP 認証維持のための職場巡回等を実施することで、高い防疫水準を維持しております。今回はそれらに関して、ご紹介いたします。

1. 防疫演習

鳥取牧場は肉用牛(黒毛和種)を飼養しており、口蹄疫の特定症状が見られた際の初動対応に関する防疫演習を毎年行っています。

特定症状とは、特に重要な家畜の伝染病に対して、農林水産大臣が指定する症状のことで口蹄疫であれば以下の症状が該当します。

- ・39.0℃以上の発熱があること。
- ・泡沫性流涎、跛行、起立不能、泌乳量の大幅な低下又は泌乳の停止があること。
- ・口腔内等に水疱等があること。
- ・同一の牛房内において、死亡数の増加がみられること。



舌の水疱(左)、流涎・鼻腔のびらん(中)、口端・上顎・口蓋のびらん(右)

(宮崎県口蹄疫防疫マニュアルより抜粋)

令和 7 年度は令和 8 年 1 月末に全職員参加で防疫演習を実施しました。当日は口蹄疫を疑う症状を飼養管理を担当する職員が発見したという設定のもと、以下の手順で机上演習を行いました。

- ① 飼養管理を担当する職員が特定症状を示す牛を発見し、獣医師に連絡。

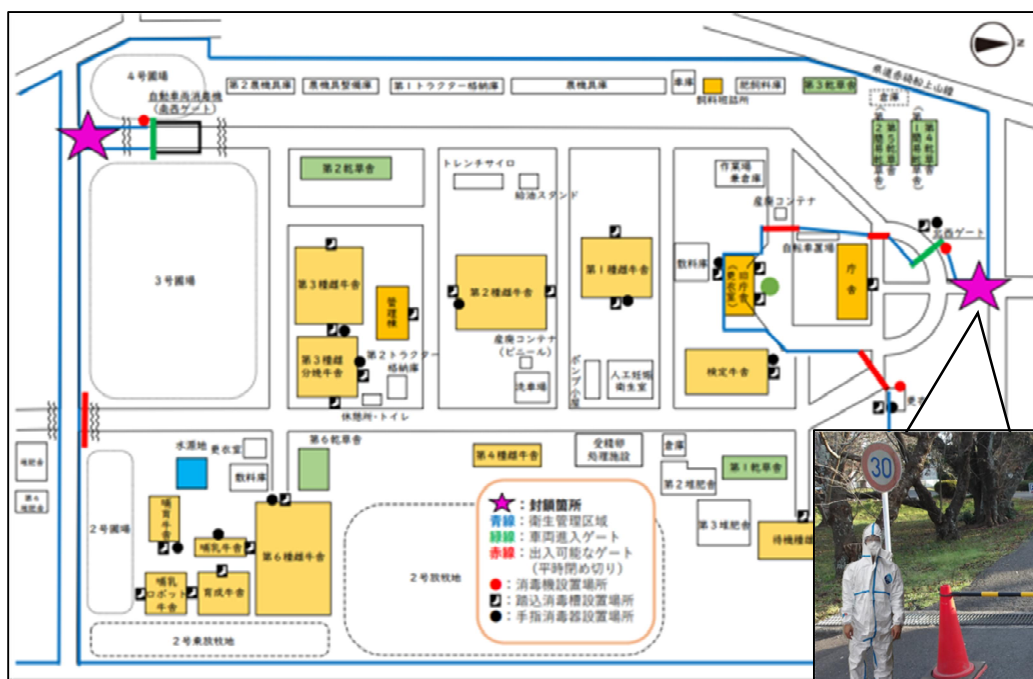
- ② 連絡を受けた獣医師は担当課長に連絡後、感染が疑われる家畜の確認に行き口蹄疫の症状を確認。
- ③ 獣医師は家保へ通報。
- ④ 連絡を受けた担当課長は牧場長をはじめとする管理職や、本所へ報告を行うとともに連絡網により牧場職員全体に情報共有。
- ⑤ その間、牧場職員は牧場出入口の封鎖及び石灰の散布、そのほか症状が出ている牛の確認等を実施。

さらに当日は、机上演習のみではなく、防疫作業に関する詳細な内容や、埋却方法等に関しても確認を行いました。



↑防疫演習の状況。左右の席に獣医師役や家保職員役などを置いて、発生した際のシミュレーションを行いました。

家畜伝染病が発生したときに周辺地域への拡大を防ぐために重要なことが⑤の牧場出入口封鎖です。鳥取牧場では、北と南に外部車両が入るためのゲートを設置しており、まずはこれを封鎖することとしています。また、外部の者が衛生管理区域近くの牧場事務所に出入りすることを防ぐため、下図のようにコーンバーを設置し、事務所職員が待機し、進入防止及び拡散防止の対応を行うこととしています。



↑鳥取牧場封鎖箇所(星印)と北側の出入口封鎖場所の職員(右写真)

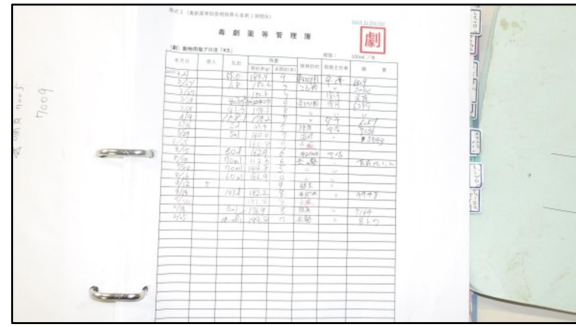
2. 家畜保健衛生所による立入検査

鳥取牧場では、飼養衛生管理基準定期報告に際し、飼養衛生管理基準の遵守状況について、管轄する家畜保健衛生所(以下、「家保」)が行う立入検査により確認しています。なお、飼養衛生管理基準定期報告とは、毎年、飼養している家畜の頭数や家畜の飼養に係る衛生状況に関し、都道府県に報告するものです。

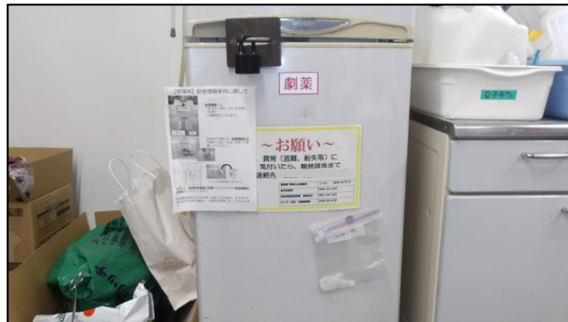


↑ 家保職員による立入検査と指摘事項の確認等。左写真は飼料庫等の確認、右写真は特に関心があったカラス罟の見学。

この家保職員による立入検査は、JGAP 認証以外にも意義があります。第一に牧場職員の目では気づかない点を、第三者の目を介することで可視化すること、第二に外部の方が衛生管理区域内に入場することで、見られているというプレッシャーがかかり、職員の防疫作業のマンネリ化を防ぐということにつながります。第三に家保職員を始めとした家畜防疫員にアドバイスや最新情報を提供いただくことで、防疫業務の更なる向上、改善、効率化につながります。



↑鳥取牧場で使用している毒劇物管理簿です。使用者がわかりやすいように、分娩時によく使う薬や、繁殖業務でよく使う薬など、分類して綴っています。



↑毒劇物は他のものと分けて保管しています。要冷蔵のワクチンなどは冷蔵庫に保管します。



↑市販の冷蔵庫用の鍵を使用して、毒劇物を適切に保管しています。



↑毒劇物以外の動物用医薬品も用途別に整理しています。保管の際にはメタルラック等を使用し、取り出しやすくしています。

4. 終わりに

以上が鳥取牧場で実施している口蹄疫の特定症状が見られた際の初動対応に関する防疫演習や、家保家畜防疫員の立入検査による防疫点検、JGAP の取り組みになります。今回ご紹介した内容を予め実施しておくことで、家畜伝染病に感染しないための対策以外にも、万が一感染した場合にも迅速かつ的確な初動により、感染拡大の防止にもつながるものと考えています。

皆様の農場におかれましても、今回紹介しました取組が参考となれば幸いです。